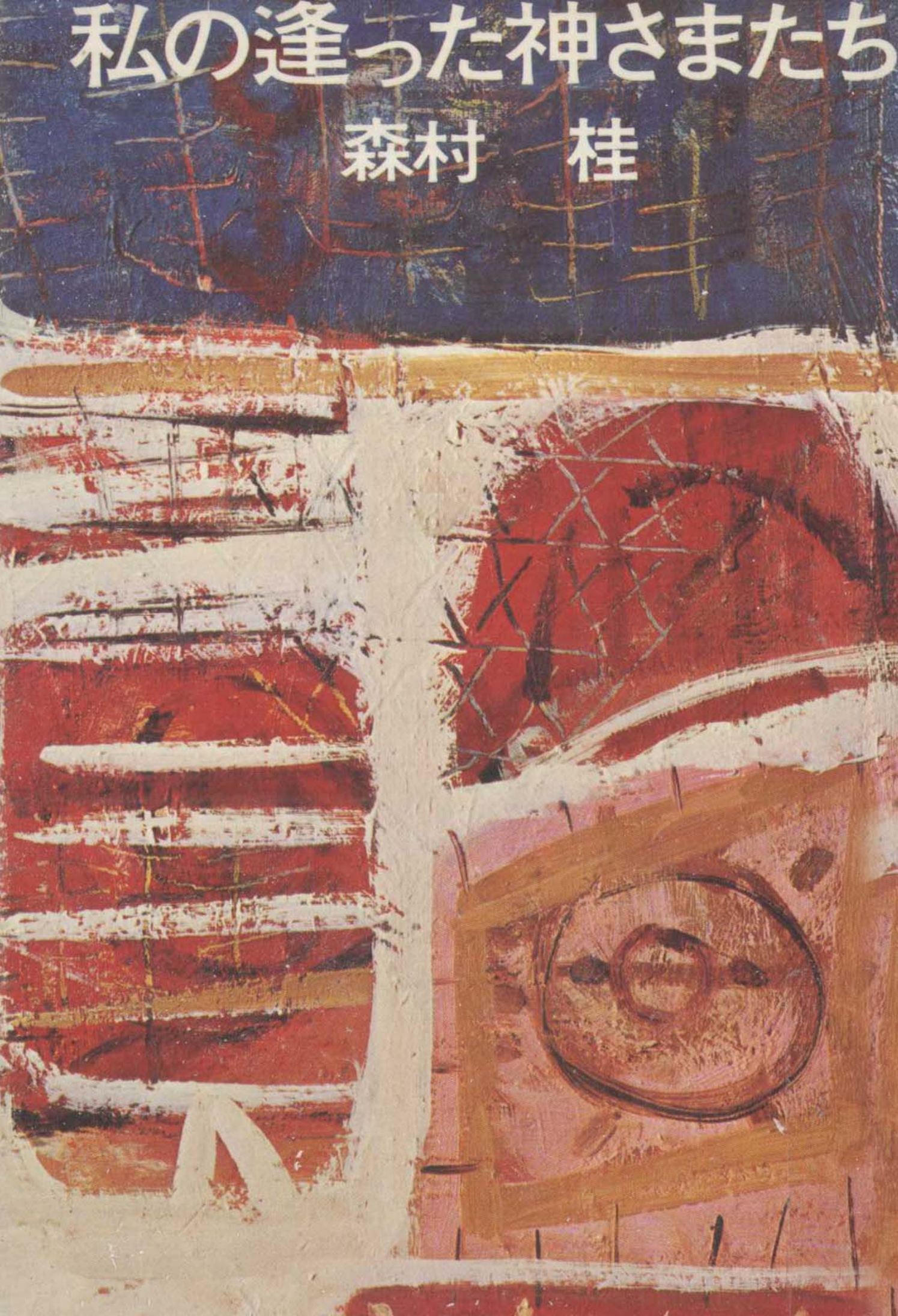


私の逢った神さまたち

森村 桂





私の逢った神さまたち

1976年4月16日 第1刷発行

森村桂文庫

著 者 森村 桂

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

振替 東京3930

電話 東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 株式会社 若林製本工場

Printed in Japan ©Katsura Morimura 1976

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。 (文1)

私の逢った神さまたち

森村 桂

目次

杏ジャム騒動

8

十和田湖の三年みそ

24

駅長さんを走らせる

38

サンタクロースの天火

52

ただでアパートを建ててくれた人

66

真珠の首飾り

80

五万円を置いていった女性

94

チャリテイの出演者たち

106

陰にいたほんとうの主催者

秋田の天国にいちばん近い村

お金だけなら耐えられる

友情の奨学資金

わが家臣松平恆忠めが

お寿司と小母さん

お姑さまの善意

あながき

118

132

144

156

172

182

196

208

私の逢った神さまたち

杏ジャム騒動



まさか私はこれほど人騒がせをしようとは夢にも思っていなかったのだ。ただ私はもともとジャム作りが好きで好きでたまらないうえに、私の本の装丁をして下さる宮田武彦画伯の家でいただいた、杏^{あんず}ジャムの味が忘れられなかったのだ。宮田家には大きな杏の木が一本あって、毎年毎年、人に分けてもなお冷蔵庫いっぱい、杏ジャムが出来るというのだ。

世の中そんな不公平なことってない。私だって、一年分の杏ジャムが作りたい。とはいえ、お店にはめったに杏は売っていないし、デパートではほんのたまに売ってても百グラム五十円とか六十円して、ジャムにするほど買ったら大変だ。

ところが運のいいことに、長野に出張に行つて帰つて来たダンナさまが、ちょうど杏の産地だから、ダンボール一箱送ってくれるよう頼んでみると約束してくれたのだ。

ダンボール一箱というと、どのくらいのジャムが作れるだろう、ビンにして二十個や三十個はある。私はお手伝いの悦ちゃんと二人でジャムの空ビンはもちろん、塩辛のビン、ハチ蜜のビンを捜す。まだ入っている梅干は他の器に入れて、それでも、やっと八つしかない。真空になるビンは売ってるけど、四百円も五百円もしてジャムより高くなっちゃうし……。はてどう

したものかと思っていた時、

「こんにちは、M牛乳ですが。とって下さいよ」

また来た。うるさいM牛乳だ。ほんとにしつつこいんだから。この忙しいのに。

「駄目よ、牛乳ビンのフタが紙じゃなくなったらとるわ」

「どうしてですか」

牛乳いっぱい飲んでるくせに、かさかさで凸凹^{でこぼこ}の顔した若いおつつあんがいった。

「ジャム入れる空ビン搜してんのよ」

「ほう、いいですねえ」

彼はお世辞笑いをしながら、私の集めたビンをながめまわしていたが、

「どうです、コーヒーのビンじゃ」

「いいわねえ」

私の目が光った。

「じゃあ、持って来ますよ、二つか三つはある筈だから」

彼はすぐ走っていく姿勢になった。

「ありがとう、じゃあ、明日から二本ずつおねがいね」

「そうですか。じゃあ、今日はサービスで四本ばかり」

彼はすかさず台所のあがりかまちに牛乳を四本おいた。しまった、家じゃみんな牛乳ぎりいだっただんだ。

兄貴の嫁さんに電話して、

「もしもし、お姉さん？ あかね、杏ジャム作るの、だから、空ビンちょうだい。今度の日曜くるとき。うん、そのかわり、おいしい杏ジャムあげるから」

友達に片っぱしから電話する。

「もしもし、コダ、杏ジャムあげるから空ビン持って来てよ」

ところが一体どういうわけか、

「空ビン？ 残念ねえ、家の台所せまいでしょ、みんな捨てちゃうのよ」

「いってくればとつといたのに。ま、一個か二個ならあると思うわ」

半日つぶして電車賃かけてやっと一個か二個持って来て、そのうちの一個には杏ジャムいっぱい詰めて持って帰られたんじゃ、どう計算しても誰も得にはならないと思うんだけど。

それでも、翌日は牛乳屋さんがコーヒーの空ビンを、薬屋さんがおとくいさんまわって集めてくれた空ビンの数々を、そして兄嫁さんと、コダやミケやオツコが、

「モリ、ジャム待ってるわよ」

と、それぞれ二個ずつおいてってくれて、そしてわが仲間、青少年福祉センター施設出身者の会アフターケアセンターの男性たちが、

「え、ジャムの空ビンね。丁度いいや、こないだイギリスからジャムの寄付があつたんだ。何とかいそいで食べきって持ってくよ」

と約束してくれて、さあ、受け入れ態勢はととのった。あとはお砂糖に、そうだ、大鍋だ。

私はかねて目をつけていた家のすぐ下の区民会館の食堂部にいつて、こっそり知ってるオバサマをよび出して、

「ね、ジャム煮るの。あの鍋借りて」

オバサマも小声で、

「いいわ。五時に終ってからあくる朝まで使わないから、コックさんに頼んどいてあげる」
「ありがと」

一年に一回ジャムを煮るために、二千円も三千円も出して鍋なんて買ってられない。世は全て助け合いだ。区民会館は、大田区みんなの会館だ。

さあ、全ては整った。いや、待てよ、それだけのジャムを作ったとなると、冷蔵庫、あとは何も入らなくなる。

「もしもし、電気屋さん？ え、うん、クーラー？ いいわねえ、ほしいわ。だけど、その前に冷蔵庫がほしいのよ。冷凍冷蔵庫？ うん、それもほしいけど、ひとまずね、五千円か六千円で、古い冷蔵庫下取りしたのないかしら。え、ある？ うん、ほんと！ わあ、おねがい」
何と運のいいこともあるもんだ、夏を迎えて冷凍冷蔵庫を買った人が、今まで使っていた冷蔵庫を手放したというのだ。夕方になって電気屋さんは、中古の、しかし、家のよりはよほどしっかりした冷蔵庫を、六千円でもってきてくれたのだった。

日本もこうじゃなきゃいかんだ。アメリカなんかへ行けば、たいてい冷蔵庫が二台ある。よその家でいらぬものは、安く買えばいいのだ。思えばバカなことをした。新婚時代、冷蔵

庫が買えなくて、毎日お使いにいかねばならなかった。六千円なら買えたのだ。ああ、このアイディアよ。杏のためとなるとこんなにさえちやうんだ。

「ただいまあ」

「お帰りなさい」

私は飛び出した。見てよジロちゃん、この空ビン、この古冷蔵庫。と、わがダンナさま、それを見て、顔をしかめる。

「すまん」

「え」

「杏はダメなんだそうだ。今が時季で、あれは、四、五日で終っちゃうんだってさ」

「うん」

「しかも、すごく痛みやすくて、送ったりしたら、むれちゃって全部腐くさっちゃうんだって。一日しかもたないっていうんだよ」

「そうなの」

私の身体中の力がぬけてしまった。そうか、だから杏はあんなにおいしいのに、お店にめったに出ないのか。ああश्यकだ、宮田画伯よ、世の中不公平すぎる。

「ごめんな。俺が車で行ってやりやあ何でもないのにさ。休みがないんだよ」

ダンナさまは、世にもやさしいお気の毒そうな目で、空ビンと私を見ていった。

「ううん、いいのよ。来年があるわ」

私はいっしょうけんめい明るい顔をしていった。

「そうだな、よし、来年は、必ず連れて行ってやるぞ」

ダンナさまがうなずいた時、パタパタパタッと足音がした。

「こんばんはー、持ってきたよ空ビン」

センターの長谷場先生と、児玉君だ。彼らは大きなダンボールを二つ、ドサングチャンと置くと、

「全部で四十個あるかな」

ダンボールの中には、きれいに洗ったイギリス製ジャムの空ビンがびっしりつまって、キラキラ光ってた。

「いやあ、大変だったよ。みんなで必死にパンにつけたけど食いきれねえだろ、しょうがないから鍋にあけてきちゃった」

「あ、ありがとう」

「足りなかったら、廃品回収の連中に言って、もっと集めてもらうよ。百個でも二百個でも」

夕食が終って、さて空ビンでも片づけようかと立ち上がった時、速達小包が届いた。何だろう、本にしては大きいし……、甲府の秋山洋子さんという人だ。なんか、変なむれたような匂いがして、紙包みが、なまあったかい。

「あっ！」

包みをあけて、私は叫んだ。

「杏だ」

なんと、まるでびわのように一列にびっしりと、しかし、その半分以上は腐った、残りの半分も傷だらけになった杏が届いたのだった。

「ほう、杏じゃないか。なんだ、お前、どうしたんだ」

私はその杏を抱き、手紙を読みながら、オンオン泣いていた。

——いつだったか、あなたが杏が好きだというのを読んだことがあります。そして家の杏がなったら送ろうと思っていました。今年は少ししかなりませんでした、どうぞ食べて下さい。

翌日のお昼、きのう秋山洋子さんの杏で作ったジャムを、悦ちゃんと二人で大事にパンにつけて食べながら、さて空ビンをくれた人達に、どういいわけをしたものか、私はただぼんやりするばかりだが、突如、頭の中に何かがひらめいた。

「そうだ、駅長さんがいる」

瞬間、私は立ち上がっていた。そうだと、せっかく今、信州でたわわに実っている杏、それが郵送でも鉄道便でも、トラック便でも、全て不可能であろうと、そうとも、長野には駅があるのだ。そしてその駅は上野駅に通じている。駅には駅長さんがいる。駅でいちばんえらい人、たいてい人のいいオジサマだ。

私は長野駅のダイヤルをまわす。悦ちゃんが、一体なにごとかと見上げてる。

「もしもし、駅長さんおねがいします……。あ、もしもし、駅長さんですか。私、東京の森村

と申しませんが」

「は、駅長でございますが」

インギンな声が返ってきた。

「実は、オタクの杏が……」

せきこんでいってしまつて私は思わず口に手をやった、バカみたい、オタクだなんて、オタクの県の杏なのに。「あ、あの、おいしくて大好きなものですから。はい、ジャムにしようと思つて、空ビンから、大鍋から冷蔵庫まで、はい、そろえちゃったんです」

借りものと中古だけど。

「ところが、杏は郵送するとむれて腐っちゃうと聞いたもんですから」

そして、いよいよ、本題。

「あの、お忙しいところ、ほんとうに恐縮ですが、どこか八百屋さんに注文していただいて上野までオタクの電車に乗せていただけないでしょうか。お金はあとで送りますから。はい、上野駅にはこちらからまいりますから」

「電車にですか」

「はい、おねがいします。ほんとうに、オタクの杏は素晴らしいもので、ぜひ東京の人たちに、食べさせたいと……」

駅長さんていうのは、これが弱いんだ。なにしろ、郷土愛のカタマリなんだから、これに訴えなきやバカだ。